

周りをぱっと明るく照らすコミュ達人



みのり太鼓 楽み(らい)

す き か おり
諏 佐 香 織 さん

みの〜れと共に生活するスタイル
Minole Life
のすすめ

No.203

旧姓が「真柄(まがら)」という珍しい姓だったこともあり、若い頃はどこへ行っても「あの真柄さんの娘か、と知られていることがちょっと嫌でした(笑)」と言う諏佐さん。今は「両親に感謝しています」と語る、充実した小美玉暮らしを満喫。持ち前のコミュニケーション力で周りをぱっと明るく照らす、小美玉市北浦区にお住まいの諏佐香織さんにインタビューします。

繋がりが気づき 感謝の心に

「当時は子どもがいっぱいいた」という江戸住宅で育った諏佐さん。小学3年生から鼓笛隊に入り、習字、絵画、ピアノ、そろばんに通い、習い事の毎日。「子どもながらに忙しかったけど楽しかった」と振り返ります。

ピアノと鼓笛隊が中学の吹奏楽部に、そろばんが金融機関への就職に繋がりで、「習い事がその後の人生に影響を与えてくれました。好きなことをやらせてくれた両親に感謝ですね」。高校でも吹奏楽を続け、社会人になっても水戸市民吹奏楽団に所属し、出産を機に辞めるまで続けました。

若い頃は美野里町から出たくて仕方がなくて、結婚して荒川沖に住みました。しかし、子どもが生まれ、働きの

がら育てるのはとても大変で「土地と家を見つけたから戻ってきたら、という両親の甘いさきやきに心が動いてしまった(笑)」北浦区に住むことに。

子どもを納場保育園に入れたとき、先生が母の知り合いで、声をかけてくれたことが大きな安心感に繋がりで「人とながりっていいな、と思えたんです」。子育てをするようになって、その「知ってくれている」が安心感になって「ああ、地元に戻ってきて良かったと思います」としみじみ。「今は地元に戻るきっかけを作ってくれた両親に感謝しています。あ、両親に感謝しっぱなしですね、私」と笑顔。

和太鼓との出会いは、納場保育園でやっている和太鼓教室に子どもが入ったことがきっかけ。子どもがみのり太鼓に入り、練習を見守るうちに自分でもやってみたい

と思うように。井坂光江さんからの「大人の同好会もあるのよ。やる？」との誘いに二つ返事で「はい、やりま

す」。楽みは現在メンバーが14名で、市民文化祭に出ることを目標に、月に2回、みのり太鼓がみのりれパークの〜れで練習しています。「知り合いが一気に増えました。繋がりが広がっていくのが楽しいです」と諏佐さん。仕事でマナーや接遇の教育を行っているので、「みのりれで学び体験することが仕事にも活きています」と語ります。

若い頃に気づけなかった、繋がりのある地域に暮らす、ありがたみを感じながら、「私から明るさを取ったら何も残らないじゃん」と豪快に笑う持ち前の元気良きで、諏佐さんは今日も周りを明るく照らしています。